二〇一九年度文芸資料研究所シンポジウム「源氏物語、伝統と未来」

# 源氏物語と組香

三條西　堯水

ただいま、ご紹介にあずかりました、三條西でございます。今、小高先生から、ありがたいお言葉を頂戴したところでございますが、今日は源氏物語と組香という話をさせていただこうと思います。ずっと見渡しますと、香道をご存じの方もたくさんいらしていただいていますが、おそらく香道ってなんだ？　という方がほとんどだと思います。そこで、香道を少し紹介させていただき、源氏物語と組香という話をさせていただこうと思っています。ご存じの方にとっては、非常につまらない話となるかもしれません。私、香道宗家という立場ですから、ただ話をするだけではだめで、香道をやっていただく方を、増やしたいという、思いもあるわけです。そういうことも含め、今日は話をさせていただこうと思います。

源氏物語は今から一〇〇〇年ぐらい前に成立したということです。香道はそれから五〇〇年ぐらい後の室町時代後期、足利義政公の時に成立したものです。お茶・茶道ですとか、お花・華道、あるいはお能・能楽といったものが、非常に熱心に研究され、熟成されていった時代に香道も成立したと言われています。この時代の文化は東山文化と言

われています。東山文化の象徴といえば、義政公の別荘、現代の慈照寺銀閣です。その東山別荘を中心とした場所で、これもひどい話で、義政公は自分の好きな人だけを集め、自分の趣味の世界を作っていただけです。それが結果として文化と呼ばれるようになっただけの話です。彼の為に世の中が非常に荒れた時代です。それを全く知らんふりして、将軍にもかかわらず、この別荘に引きこもり、自分の好きな人を集め、政治をやらず、お能、お香、お茶三昧なことをやっていたわけです。決して政治家としては褒められた人ではありません。しかし、今直接我々が目にすることができる文化が育まれたということでいえば、見直してあげてもちょっとはいいのかとも思います。香道はそういった時代に成立したと思ってください。まさしく、先ほどご紹介があった、三條西実隆が、生きていた時代ということになります。

さて香道で使用する香を紹介しようと思います。これは香木と呼ばれています。香木と言いましても、杉の木とか桜の木など日本の木でも香りはしますが、基本的には決まった木を使用することになっています。その一つが沈香と呼ばれる種類の木です。これは、東南アジアに生える常緑高木でジンチョウゲ科のアクラリアという木の樹脂です。もともとは水の中に入れると沈むので沈香、あるいは沈水香と呼ばれました。実際は、水の中に沈まなくても、沈香と呼べてしまうものもあるので、これは過去の表現だと思うのですが、ずっとこの表現で言い習わしています。

有名なところですと、つい先日まで東京の国立博物館に、「蘭奢待」というのが、奈良の正倉院の御物という形で出ていました。あれは黄熟香なので沈香じゃないとおっしゃる方もいらっしゃいますが、沈む沈まないではなく、あくまでも香りで判断すべき問題であって、決して沈むから偉いとか、沈まないから駄目という話でありません。

この中にも上野で行われた正倉院展に行かれて、蘭奢待という一メーター五〇センチくらいある香木をご覧になっ

た方もいらっしゃると思います。なあんだ、ただの木かと通り過ぎた方もいらっしゃると思います。早く鏡が見たい。私は五絃の琵琶が見たい。こんな木なんかどうでもいいじゃない、と思った方もいらっしゃったかもしれません。しかしこの蘭奢待は、天下一の香木と言われています。いろいろな方々、先ほどでた義政公や織田信長公、あるいは明治天皇など、時の権力者たちが切り取ったと言われています。

この正倉院の御物は、正倉院展という形で、毎秋奈良の国立博物館で展示されます。毎年毎年同じものが出るわけではありません。蘭奢待が前に出たのは八年前（二〇一一年）、その前は更に一四年前、だいたい同じものは一〇～一五年ぐらいごとにしか出てきません。ですから蘭奢待もこれから先一〇年～一五年は出てこないと思います。しかも東京には二度と来ないと思います。ですから、私もこれで見納めになるかなと思いながら、東京で三回も見に行ってしまいました。

さて香道の世界では、この香木を六国といい、六種類（七種類）に更に細かく分類して使用します。伽羅、羅国、真南蛮、真那賀、佐曽羅、寸聞多羅、（新伽羅）といいます。ここにもひとつ大きな誤解があるのですが、これは決して産地をあらわしている名称ではありません。どこそこでとれたから伽羅になるということでありません。どこそこでいうと、例えば真那賀は、シンガポールのところにマラッカ海峡というのがあり、そのマラッカがなまって真那賀となり、寸聞多羅は、インドネシアにスマトラ島という島がありますが、そのスマトラが寸聞多羅になりました。でも決して寸聞多羅がインドネシア、スマトラ島でとれたわけではありません。

実際に私はもちろん香木を使いますが、それがどこ産かは全く知りません。八百屋さんみたいに、これは千葉産のキャベツですとか、神奈川産の大根ですという表示があるわけではありません。あくまでもどういう香りかによって使用します。皆様は香りが違う香木と思っていただければと思います。くわしく知りたい方は、ぜひぜひお香のお稽

古の方をお尋ねいただければと思う次第です。

香道の席は、香席、香筵と呼ばれます。お香を炷く役割の香元と、記録する役割の執筆がいて、コの字にひかれた赤い毛氈の上に座る連衆というお客さんがいます。香元の炷いた香炉が連衆の間を回ります。これも一つの香炉が回るわけではなく、何個か用意された香炉が周回し、香席が進んでいきます。この席で行われるものが、組香となります。やっと今日の題のところまで来ました。

組香は、先ほどご紹介した六国という香木の何種類かを使用し、その異同、同じか違うかを当てるという、少しゲームのような形態をしています。現代の香道においてはほぼ九九パーセントこの組香を行います。その主題の多くは、文学的要素、和歌や俳句、あるいは漢詩などを元にします。その中で最も多いのが和歌を主題にしたものです。文学的要素ということで、小説などもこの要素の中に入ってきます。当然、源氏物語もその要素の一つになります。

組香はとてもたくさんの数があります。江戸時代末の本に出てくるのは二〇〇～三〇〇です。今も新しく作っていますので、さらにその数は増えていると思います。その中でも非常に古典的な「三十組組香」というものがあります。三十組は更に、「古十組」「中十組」「新十組」と分類されます。

「古十組」は一六世紀頃までに成立したとされ、十炷香、花月香、宇治山香、小鳥香、郭公香、小草香、系図香、源平香、焚合十炷香、鳥合香があります。このなかの源平香の「源」は源氏物語の「源」ではなく、源氏と平家の「源」です。源氏物語とは関係ありません。この中には源氏物語に関連するものはありません。

「中十組」は一七～一八世紀頃までに成立したとされ、名所香、源氏香、競馬香、三炷香、矢数香、草木香、舞楽香、源氏四町香、住吉香、煙争香があります。この中の源氏物語に関連する組香は、源氏香、舞楽香、源氏四町香の三つです。

「新十組」は一八世紀以降に成立しました。花軍香、古今香、呉越香、三夕香、蹴鞠香、鶯香、六儀香、星合香、闘鶏香、焚合花月香があります。ここには源氏物語に関連する組香は特にありません。これら「三十組組香」は、昔はこの三〇組だけやっておけばいいといわれていたこともあります。その中で源氏物語に関係するものは三つあります。

その他にも源氏物語に関連する組香があります。これは『香道蘭之園』という本の八巻と九巻に載っています。「源氏千種香」といい、源氏物語の各巻の名前に香を付け、それぞれその巻をテーマにした組香となっています。ここで、一つ注目したいことは、この「源氏千種香」は、帚木巻から始まって手習巻までというところです。ここを覚えておいてください。ご存じのように、帚木巻の前には桐壺巻というおそらくみんな知っている巻。そして、手習巻の次、最後に夢浮橋という巻がありますが、その組香はありません。

更に私の祖父三條西堯山（公正）も、源氏物語に関する組香を作っていました。「源氏物語新組香」といいます。桐壺香からはじまり、帚木香、空蟬香、夕顔香、若紫香、紅花香、紅葉賀香、面影香、濡衣香、花宴香、葵香、賢木香、花散里香、浦波香の一四個があります。これは上中下の本が出る予定だったみたいですが、どうも上巻しか出ていないようです。このあとの組香は作られていないようです。巻頭の言葉には、その当時大変な源氏物語ブームだった。ドラマや映画などいろいろなところでブームとなっていた。香というのは源氏物語にとって切っても切れない要素です。ならば我々現代の香人も、先人たちが作ったものだけではなく、新たに源氏物語をテーマにした組香を作ってみようという事が書かれていました。

最後に組香の中身について少し細かく見ていこうと思います。まず中十組の「源氏四町香」は、先ほどの井筒先生の話しそのままの組香となっています。四つの町に分かれる、源氏物語中の源氏の家六条院。二五二メートル四方の

四分の一、そこにそれぞれ源氏や女性方が住んでいます。この組香は、紫の上、女三（女三宮）、花散里、明石の上、それから源氏という五種の香が用意されます。紫の上、女三宮、花散里、明石の上は「試香」という、ヒントになる香があります。その試香のそれぞれの香りを記憶します。源氏には試香はありません。その後「本香」と言い、実際に当てなければいけない香がそれぞれ三つ三つ三つ三つ、源氏だけ一つ合計一三個出てきて、その出た順番を当てるという組香です。さらにこの組香は「一炷開き」といい、一つ香を連衆に出し、それをみんな聞いて、聞き終わったら答えをすぐに出し、その後答えを発表し、答え合わせをし、一回終わり。それを一三回繰り返します。通常の組香は全ての香が回った後に答えを書きますが、これは一回ずつなので非常にのんびりと香席が進みます。

もう一つ、同じく中十組の「源氏香」について説明をしようと思います。これは名前だけご存じの方も多いと思います。この組香は五種類の香が五つずつ合計二五個用意されています。二五個のなかから無作為に二〇個とり五個だけ炷きます。その五個が同じか違うかを当てます。その答えの書き方に特徴があります。縦に五本の線を引き、右側から一炉目二炉目三炉目四炉目五炉目ということで、その香りが同じと思ったところを上を線でつなぎます。クロスしているところは、違う香りと考えます。その組み合わせが今日唯一私がお配りした源氏香の図です。これを見ていただくと、五二個それぞれ全くユニークな図となっています。連衆はそれぞれ答えを探して書いていきます。例えば葵ですと、一と二と三は違う香り、四と五が同じ香りとなるわけです。

もう一つ、先ほど「源氏千種香」には桐壷と夢浮橋がないという話をしました。源氏香の図にもありません。これは物理的に作れません。同じ香りの物の上をつなぐという決まりに縛られると、これ以外の図は生まれてきません。これは本当に頭のいい人がいて、誰が作ったものかわからないのですが、その桐壷と夢浮橋を除いた真ん中の五二に対してこの図を当てはめました。これは本当にすごいことで、人間、イコールは簡単です。しかし一つ違う、二つ違う

とそこで諦めてしまいます。しかし工夫して二つ除いた人がいた。これは本当に素晴らしい着眼点だと私は思います。

この源氏香の何が有名かというと、デザインとして有名です。香道や組香を全然知らない方でも、着物の模様で見たことある人は多いのではないかと思います。その他にも色々な所でこの図は使用されています。少しそれを紹介しようと思います。例えば、菓子の図柄として、源氏香の図全てではありませんが虎屋さんの菓子があります。

街中でも源氏香の図を見ることができます。おそらくお香好きな東京の人はみんな知っていると思います。日本橋にある柳屋ビルです。ビルのマークとして源氏香の図が使用されています。又駅の通路にも源氏香の図を見ることができます。しかも丁寧な説明も書いてあります。これは京都駅にあります。実践女子大学様もぜひぜひ、源氏香の図をどこかに付けて欲しいなと、落書きでもいいので、壁に書いていただくと、何これはということになっていいかもしれません。

日本の建物の中でも色々な所に使用されます。例えば和室の欄間に使われている場合、隣り合わせの部屋で逆のデザインとなるというような工夫がされています。

今日の話の最後は外国で使用されている源氏香の図です。イタリアのローマに日本文化会館というのがあります。そこの壁にも源氏香の図のレリーフがついています。

短い時間ではありましたが、源氏物語と組香という話をさせていただきました。これらの五本線の図を見たら、どの巻の図かというのは、難しいですけれど源氏香だと思ってください。お香に使うものだなと考えてください。最後に繰り返しとはなりますが、実際にお香やってみたいという方は、いろいろなところでお稽古をしていますので、来ていただければと思います。どうもありがとうございました。